

教養部八七年度 教員一般公開募集のまとめの一側面

鷺田 小彌太

一九八七年二月十九日『朝日新聞』の全国版に、「札幌大学が教員を募集」という見出しで、小さな記事が出た。全文は次の通りである。

《札幌大学（札幌市豊平区、木村真佐幸学長）は十八日、教養部の専任教員を一般公募する、と発表した。従来の教科の枠を超えた新しいカリキュラムづくりの起爆剤になる人材を、専門領域をあえて指定せず、応募者自身に「大学の教養課程はどうあるべきか、自分はどうか貢献できるか」をテーマにした小論文を書いてもらい、選考するユニークな試み。応募資格も、採用時の年齢が二十七歳以上で日本語の堪能（たんのう）な者というだけで、国籍や教育研究歴などは問わない。

採用予定は「分野を問わない」二人のほか、保健体育、英語を担当する者各一人の計四人。来年四月から一人、六十四年度四月から三人を、経歴に応じて教授、助教授、または講師として採用する。

応募は二百字詰め原稿用紙二十枚程度の指定テーマの小論文に必要な書類を添えて、三月二十五日までに同大へ。送り先と問い合わせは〒062札幌市豊平区西岡三条七ノ三ノ一、札幌大学教養部（〇一一八五二一一八一）。

この日の朝から、急ぎ設置された部屋の三台の電話は、鳴ることを当分やめなかった。問い合わせは、一ヶ月余の間、優に二千件を越えたであろう。朝九時から五時まで、全国各地から、とぎれることのない電話の音が、関心の大きさを如実に物語っていた。

以下、（いくぶんの私情もまじえて）、質問に応じるという形で、八七年度実施した札幌大学教養部の教育公募について語ってみたい。

Q——そもそも、一般公募という形に踏み切った動機は何だったのか。

A——大学は学部増（法学部）を八九年度にめざしていたので、教養部のまとまった定員増が必要であった、ということが第一です。しかし、この定員増を、単に欠員補充という意味あいだけでなく、教養部全体のカリキュラム改革と結びつけられないか、という声が漠然とした形で教養部長（平尾三郎・当時）サイドから出てきた。そこには、これまででの人事採用の欠陥をいくぶんかでも改善しようという意図がこめられていた以上の、具体的な改革プランはなかったように思います。

Q——しかし、委員会らしきものが出来ましたね。ど

ういう案配だったのですか。

A——教養部長の指名ということでしたが、七人の委員が選出されました。私たちは七人委員会とよんでいます。長が林辰男でした。これは、カリキュラム検討委員会の中心メンバーであり、カリキュラム改革と教員採用の中心を担ってゆくことになりました。

Q——最初、どんなことが議論になりましたか。

A——八六年の暮ごろから、人文・社会・自然の系列別をとり払うこと、保健体育系列で非常勤をなくすことなどの改革をすること、現在の教養部のスタッフで最大の教育効果をあげられるようなシステムを造りあげること、などが大まかな目標設定の合意点に達していたように思います。

札幌大学が教養部の充実をはかって専任教員を公募

昭和六十二年二月

札幌 大学

このたび札幌大学（学長・木村真佐幸）は、教養部専任教員の採用にあたり、新しい視点から広く一般の方の応募を求めています。

今回の公募では、大学の内外をとわず、さまざまな分野で活躍されている方々に広く呼びかけ、また採用したい方の専門領域をあえて指定せず、応募者自身が今日の大学教育にどう貢献できるか、そのために、どのように意欲を燃やしているかを、小論文を通じて表明していただき、これ

しかし、特に、これでゆくというような理念や定見はなかった。いわゆるアバウトな出発、とりあえずの着手ということだったように考えます。

Q——具体的には、委員会内外——とりわけ教養部教授会——で、どのような合意がとりつけられて進んだのですか。

A——第一に、次のような公募文章を、マスコミ等の媒体を用いてバラマクことが、教授会で決定された。これは、教養部長と七人委員会の合作だった。別に、通常の教員公募の形で、大学や研究機関に公募書類（定型）を配布したが、この公募は、形式的には、二形式をふんでおこなわれた。ということになります。

を採用の基準とする方法をとりに入れています。

採用予定人員は、保健体育、英語を担当する者各一名のほか、分野を問わないで二名となっています。また、採用予定年月日は、昭和六十三年四月一日に一名、次年六十四年四月一日に三名となっており、いずれも採用時の待遇については、教授、助教授または講師となっております。

このような新しい公募の背景には、今日の大学生に求められているのが、現在、わが国が迎えている激動の時代を真に切り開く知と力であるにもかかわらず、幼年期からの社会・家庭・教育環境に影響されて、将来社会のなかで生きぬくために、何をどのように学ばよいかかわからず、しかもそれを主体的に考え、たくましく実行する力に欠ける者が増えつつあるという現況があげられます。

（別添資料1参照）

大学の教養課程の目的の最大のものが人間教育にあるとすれば、このような学生に対する適切な教育が、今日なによりも必要とされているといえるでしょう。そのために、時代が人類に課している諸問題に対して、豊かな経験にもとづいた具体的な問題意識をもち、その解決のみちを次代を担う学生と心を通いあわせながら、追求しようとする意欲と創造力をもった方を、教養課程を担当するスタッフのなかに加えることはきわめて大きな意義があるものと考えられています。

ちなみに札幌大学は昭和四十二年四月の開学で、現在、経済学部、経営学部、外国語学部（英語学科、ロシア学科）、それらの教養課程を担当する教養部、その他に女子短期大学部があり、約五千名の学生が二十万平方メートルを超す広大なキャンパスで大学生活をおくっています。教養部には、現在三十名の専任教員が在籍し、開講科目は四十七科目（別添資料2）となっています。専任教員公募の詳細は次の通りです。

〈専任教員公募要領〉

◇担当科目

- ① 保健体育（但し、他の科目についても担当可能な者が望ましい。）
 - ② 英語（但し、他の科目についても担当可能な者が望ましい。）
 - ③ 分野を問わない（例えば国際性にとむ科目等々）
- ◇採用予定人員
- ① 一名
 - ② 一名

③ 二名

◇採用予定年月日

昭和六十三年四月一日 一名
昭和六十四年四月一日 三名

◇採用時の待遇

教授、助教授または講師

◇任用期間

定年七十歳まで。

希望により有期も可（最低四年程度）

◇応募資格

- (イ) 年齢……採用時二十七歳以上
- (ロ) 国籍……国籍は問わない（但し、日本語の堪能な者）
- (ハ) その他、教育研究歴の種類、業績等の種類は、問わない。

◇応募手続

- (a) 必要書類
 - (1) 履歴書（写真貼付）
 - (2) 身上書
 - (3) 健康診断書
 - (4) 論文等の業績現物ないし業績経歴書
- (b) 小論文

テーマ…「大学の教養課程はどうあるべきか、自分はどう貢献できるか。」（日本語にて二百字詰め原稿用紙二十枚程度、但し②応募の者は英語にてダブルスペース十枚程度）

◇応募の受付締切日および採用予定通知日

応募締切日…昭和六十二年三月二十五日(水)
採用予定通知日…昭和六十二年四月中

これにも大変な労力がいました。つまり、力仕事です。論文十本分書くぐらいのエネルギーが必要でした。

③そして、小論文と業績等を、七人各自が全応募者分を読み、チェックする作業がはじまりました。一人で千人分読むのです。パスはできません。ちなみに応募者状況は次のようでした。

〈教養部一般公募応募者状況〉

応募者総数 千名

性別応募者数

男性 九百二名

女性 九十八名

居住地別応募者数

札幌市内 二百三十四名

札幌以外の道内 百九十五名

道外(国内) 五百六十四名

外国 七名

国籍別応募者数

日本 九百九十名

外国 十名

分野別応募者数

保健体育 六十六名(三名)

英語 四十八名(二名)

その他の分野 八百七十六名(十五名)

不明 十名

※()内数字は、他の分野と重複

年齢別 (平均年齢・四〇・八歳)

二十歳代 百十九名(最年少・二十四歳)

三十歳代 四百二十六名

四十歳代 二百二十名

五十歳代 百八十名

六十歳代 四十七名

七十歳代 一名(七十三歳)

不明 七名

Q——いわば、基礎作業が大変なのですね。しかし、本番の方がもっと大変だった、と思うのですが。

A——そうです。第一に、どの分野(分野を問わないとはいいながら)をとるのか、第二に、採用選考基準は何か、第三に、教授会との関係をどのようにとってゆくか、が当初一番頭をなやませた問題でした。

①教授会メンバーとの関係では、書類は、特定の日を設定して、公開し、個人推せんを認め、その推せんを最大限尊重しました。(具体的には、最終しほりこみ段階まで、選考対象者からはずしませんでした。)

②特定の分野、選考基準を特に決定せずに当初出発しました。七人委員会の頭をなやませたのは、千人から四人をどのようにしほり出すかということ、予想だにできなかったことです。

Q——ではどうしたのですか。

A——教授会で、七人委員会は、「予備選考委員会」として認められ、候補者を教授会に推薦するという仕事を担いました。また、その候補者決定にいたる間も、可能なかぎり(私見では、必要以上に)、教授会ならびにそのメンバーに合意を得るような場を設定する努力を払いました。

全員が書類を読破し、自己整理が一応ついた段階で、具体的なしほり込みに入りました。

①応募者一人一人に、七人が、○△×で評点をつけまし

た。簡単な論議もし、評点変更も認めました。(付録資料参照)

全員×だった人は、第一次選考から除かれました。この段階で、三百四十五人残りしました。

②第二次選考は、とくにこの人を推すという○の付かない人を除外しました。残ったのは九十五人です。(分野別に集約しますと、保健体育五、英語十一、分野を問わず七十九でした。)

③第三次選考は、過半数の人が○を付けた人を残しました。(△、○への移動も認めました)。もとより、議論をして、特定の分野等で、とくに残したいという人の推せんがあれば、残すか否か、慎重に検討しました。この段階で、二十八人(内訳、体育四、英語五、分野を問わず十九)へと激減しました。

④第四次選考段階で、はじめて残った人をカテゴリーライズしました。

ここで、予備選考委員会は、大休息しました。保健体育、英語という比較的分野がハッキリしているところは別として、「分野を問わない」という分野に教員をどう決定するかということが、切実な問題になってくるからです。

Q——第四次選考は、具体的にどう処理されたのですか。

A——選考過程の中で、別途、教養部長やいく人かの教員にも参加してもらって、カリキュラム改革のカガミをつくり教授会の了承をえるという作業も平行させていました。大まかに、次のような改革骨組の合意も形成されていきました。

そこで、第四次選考では、下の表ともならみ合せ、第五次審査(面接)に残す人を十九名にしぼり込みました。(内

訳、保健体育三、英語三、分野を問わない十三)です。

Q——面接は、どのように行われたのですか。

A——⑤面接は、四月十八、十九両日、市内の某ホテルで行われました。面接者一名につき三人の質問者を決め(予備選考委員から)、「面接要領」にもとづき、朝九時から夜十時まで、続けました。(二人約四十分割。)

面接は、教授会メンバーには公開で、必要があれば質問も可という形式をとりました。

面接は、(私の経験では、おざなりで形式的なものは、有害無益です。)論戦はさけるべきですが、かなり深いところまで応答がなされ、参加者にとって、きわめて有意義なものとなりました。

⑥面接の結果をふまえて、翌日、教授会に候補者を提出する第五次選考を行いました。(七人が一同に会した時、最後だという緊張感と、すでに先がみえたという安堵感が重なって、二ヶ月の疲労を沈みこみますような虚脱感が支配し

教育課程表(たたき台)

① 必 ② コ ③ 細 ④ 心	科目の配列	①国際関係	②地域研究
	① 必 ② コ ③ 細 ④ 心	a b c d	a b c d
	① 必 ② コ ③ 細 ④ 心	③人間論	④自然と環境
	a b c d	a b c d	
語 学	① 必	総合科学入門(学問のすすめ)	
	① 必	基礎ゼミナール(文庫作法) 1年	
	① 必	各教員の専門ゼミナール 1.2年	
① 必	① 必	保健体育	
① 必	① 必	芸術(英・文・学・行・表)	

ておりました。)

激論はなかった。十九人全員採用でも、異議のわきかねる人材の方たちばかりが残っていたからであった。体育(二名)と英語(一名)はすんなり決り、分野を問わないも、個人的な二名が決った。(複数は、順位を付した。)

教授会には、詳しい推せん文を出した。予備選考委員会の意志が、尊重される形で、教授会決定がなされました。

Q—採用内定者について、マスコミ等から公表要請はなかったのですか。

A—ありました。学長、教養部長同席で、道庁記者クラブで会見しました。そこで、次のようなメモが手渡されました。

氏名	年齢	国籍	現職	学歴	備考
A氏	28	日本	東証一部上場企業	学士	バスケットボール ナショナルチーム・メンバー
B氏	40	日本	国立大学 教員	修士	英語、英文学、総合科目等を 担当。日本及び外国の大学で 文学、哲学の修士号取得。
C氏	57	日本	総合商社	博士	海外特にソ連・東欧関係に15年間 勤務。日本の大学で非常勤講師。 総合科目を担当。 外国の大学で経済学博士号取得。
D氏	40	韓国	関西の大学で 非常勤講師	修士	朝鮮現代史、現代韓国経済論、 朝鮮語、フランス語を担当。 パリ大学で修士号取得。

Q—一般公募人事は、これですべて終わったのですか。

A—そうではありません。第一に、信州大学等の例にならって、応募者の中から「講師団」を構成する依頼をおこないました。この公募で、社会的関心をひいたというだけのイベントに終わらせないための、アフターケアとして、とても大切な事業です。

第二、法学部増設申請(第一次)の目途が立った段階で、さらに四名の採用を必要とすることになった。(この点は、一般公募が開始する以前から、予想されていきました。)

ここに、次のようなメモがあります。

〈推薦委員会議事録〉

推薦委員会委員 平尾、林、倉島、鈴木秀、戸村、

奥村、鷺田、木村(英)、鈴木礼、

上原、山本

第一回推薦委員会 六月十二日(金)

一 委員会編成の経過

● 六月一日(月) 第六回教授会に於いて、学長から要請のあった移籍に伴う二名の補充人事と実増百五十名の場合是对処する追加二名の人事の合計四名の採用について、カリキュラム改革と連動させて作業をすることという条件でカリキュラム検討委員会のメンバーがこの作業に当たることになった。

二 委員会編成後の経過

● 六月四日(木) カリキュラム検討委員会に於いて、八日(月)に拡大カリキュラム検討委員会を開いて教養部構成員の個人の意見を聴取することにした。

● また、実増百五十名に伴う二名の人事は、評議会で合意を見ていないので、評議会の動きを見ながら作

業をすることにした。

● 六月八日(月) の拡大カリキュラム検討委員会は参加者が少なかつたが、個人の意見・要望を聴取した。しかし、特別の提案はなかつた。また、未だ話し合いの場を持っていない系列もあつたので、検討委員会としてまとめの段階には入れる状態ではなかつた。

● 六月八日(月) の評議会でも、実増部分の人事に結論が出なかつた。タイムリミットがあるので、教養としては可能な所まで作業を進め、準備をするべきであるという判断をして十二日(金)に第一回推薦委員会を開催することにした。

3 今後の作業日程

以下の日程で推薦作業をすることにした。

十五日(月) 評議会

十六日(火) 教授会 (日程・作業方法手順提案)

一六・三〇

十七日(水) 選考作業開始

十八日(木) 学科目設定に係わる意見聴取

一六・三〇

十九日(金) 選考作業 (絞り込み)

二十日(土) 選考作業 (絞り込み)

二十一日(日) 選考作業 (絞り込み)

二十二日(月) 教授会 (候補者名簿提出・承認・決定)

二十三日(火) 候補者面接・意志確認

二十五日(木) 推薦委員会

二十九日(月) 教授会 (最終決定)

右のような経緯にもとづいて、四名の採用を決定しました。候補者は、一般公募者の中から、あらためて選考し、

面接、決定手続等は、まったくのリピートです。

つまり、一般公募で、最終的には、保健体育一、英語一、分野を問わない六名の採用をえたわけです。

Q——公募過程全体にわたる反省点などについてはいかがですか。

A——カリキュラム改革と連動した教員採用という点で、エネルギーの支出に応じた成果があつた、と自負してよいと思います。(私は二ヶ月何も出来ず、そのつけが、二年後の今もつづいています。しかし、力のある、熱意のある先生を迎ええたという喜びは、最大のものです。)

第二は、学長(木村真佐幸)や教養部長(平尾)が、実質的なイニシアをこの委員会に与えてくれ、仕事の方はやり易かつた。(本当に感謝している。)そのことで、外部からの雑音にも、余裕をもって対処できた。

第三は、七人委員の間に、いくぶん以上の意志疎通ができて、改革の意志が強固になつた。その反面、短期間に、しかも、過重な仕事をこなさなければならぬという条件のため、委員以外の人々に、いちいち、実質についてまで、膝をつめて話しあう余裕がなかつた。(つまり、独走ということに映つただろう。強権的振舞いに見えたかも知れない。きつとそうだろう。)

以下は、私見の類いです。

第四は、人事は、それ自体、気骨の折れるものだ。それを八人も、一度にやつた。しかも、世間の関心を浴びる仕方だ。その成果がどんなに大きく見えても、この人事を生かす改革なり、教育・研究なりの前進に、実質上のものがなければ、空しい、ということになる。だから、八九年度からはじまる、新カリキュラムの実施過程のすべてがためされる、ということになる。

第五は、人事に全力（金もだ）をつくせ、というのが私の意見である。大学は、その九〇％が教員の質で決る、とも思っている。カリキュラム改革とは、教員のパワー・アップだと定めなければ、とんでもないことになる、というのが私見である。

これは、まったく蛇足の部類だが、林辰男や私は、改革はよほど好きでない。そのような人間が、いくぶん働いた。だから、まあ、大目に見て下さい。というのが居直りに似た気持ちとしてある。

先月、新任の先生方を迎えて、小さなパーティがあった。倉島武徳がいなかった。林も鈴木礼既もいなかった。いくぶん以上にさみしかった。

最後に、新任の先生方をお願いしたい。よろしく、力を尽して下さい。別に札幌のためなどといわない。教育の水準をあげるために、とっておこう。

(八九・三・二十二)

*次に資料として、メモ（倉島が作成し、委員会の了承をえた）を示しておこう。

〈予備選考委員会議事録〉

第一回 予備選考委員会打ち合わせ 三月九日(月)

1 委員 平尾教養部長

林 (世話人代表)

倉島 (世話人代表代理)

戸村 木村 (英) 上原 鈴木 (礼) 鷺田

2 予備選考のための予備作業について

教授会から委任された作業を遂行するために、三月十二日にそれまでに届いた書類を、予備作業として仕分けしてみる。

第二回 予備選考委員会

三月十二日(木)

予備作業を遂行するうえで、以下の判断基準を取り決めた。

1 審査対象除外者及び仮受付

●書類不備とみなすもの

a 小論文・履歴書の全欠落又は一部欠落

b 業績現物・業績経歴書ともに欠落

c 小論文の極端な量的不足

●仮受付扱いするもの

a 書類の一部を「後刻送付する」と明示したもの

b 三月二十五日までに到着すれば正式に受付ける

c それまでの期間「仮受付」として作業をしない

2 次回作業日程

●三月十七日(火)一三・〇〇

●予備選考基準及び事務的整理の打ち合わせ

第三回 予備選考委員会

三月十七日(火)

1 今後の作業手順について

●予備選考委員会の性格

●受付一覧表を教授会に提出する

●教養部教員全員に推薦する権利を認める

●前項の推薦に当たっては「理由書」の提出を求める

●今後の進め方について(手順表の点線より上)は、

第一次予備審査の結果を見て再度提案する

2 作業手順表

3月18日(水) 教授会 作業手順提案

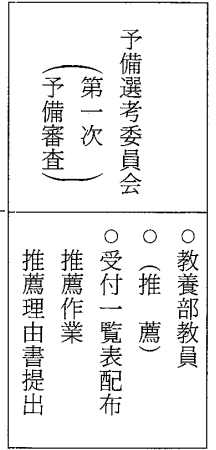
3月28日(土)

○予備選考委員会
(仕分け作業)

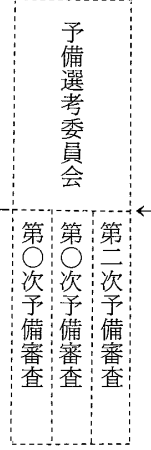
3月30日(月) 教授会



4月4日(土)



4月10日(金)



4月20日(月)



第四回 予備選考委員会

三月二十三日(月)

1 第一次選考のための読み取り開始

●七人全員が必ず読み込むこと

●第一次選考に通過する条件は、七人のうち一人でも推薦をすれば残す

●必ずしも統一評価基準は設けない

●記号の意味 「○」残すべきである

「△」残した方がよい

●驚田委員が教授会に提出する「受付一覧表」を作成する

第五回 予備選考委員会

三月二十八日(土)

1 今後の作業日程

3月30日(月) 教授会へ受付一覧表を提出

4月1日(水) 推薦のための資料閲覧(作業遅延のため変更した)

4月4日(土) 推薦締め切り

4月7日(火) 教授会(面接の目的を付けるため教授会の承認を得る)

2

4月10日(金) 教授会審査のための絞り込み
4月17日(金) 面接
教授会提案事項

●上記日程を承認してもらう

●予備選考委員会は第二次審査以降も引き続き選考作業を進める

●予備選考委員会の顧問として高田・伊賀上・梅原・宮良・鈴木秀・高松氏を委嘱する

第六回 予備選考委員会

四月五日(日)

1 今後の法学部設置から完成までの経過と可能性

●68年の教養部年令構成(法学部完成年次)

60才代 9名

50才代 11名

●欠員予定人数

63年 2名(教育1名を含む)

64年 2名

66年(法学部スタート) 1名

68年(法学部完成) 1名(66～68年の間に教養部から移籍2～3名)

●採用に関する留意事項

社会人・マルチ・外国人・教育研究者のバランス

2 今後の選考過程(教授会へ提案)

●第一次選考 予備選考委員会の一人でも推薦したものの約三五〇名

●第二次選考 予備選考委員会が顧問・教授会構成員から意見を聴取し諸事情を考慮して40～50名に絞る

●第三次選考 予備選考委員会が顧問・教授会構成員から意見を聴取し面接予定人数まで絞る

体育 3名程度

英語 3名程度

分野を問わず 10名程度

第四次選考 面接

第五次選考 集約

教授会 複数推薦で提案し投票を求める